

## クラーク館の尖塔に

なつかしい顔がそろっていた。男性も女性も多くは中年太りしていたり、額がすっかり広くなったりしていた。それでも二十七年ぶりに再会した戸惑いは一瞬のことだった。ひとこと交わせば、たちまち学生時代の顔がたち現れてくるのだった。

昨年の五月、京都で「同志社大学新聞学有志同窓会」という名のあつまりがあった。気ままに仲間がつどい、それにそれらしいタイトルをくつつけたという程度のことだった。呼びかけ人は高橋幸子さん。趣旨は恩師・鶴見俊輔先生の快気祝いと、鶴見ゼミの同期である土井清之君の「車いす記者奮戦記」の出版記念会を兼ねて——というこ

とだった。

そのようなわけで集まってきたのは、土井君と同期である六七年卒業の鶴見ゼミ仲間が主体だったが、鶴見ゼミの先輩あり他ゼミの仲間ありといった具合だった。総勢十六人の小さな集まりで、この中には土井君の介護役としてつき添う妻の可能さんと、私の妻が含まれていた。

先輩では「添田啞蟬坊・知道」などの著書があるフリーライターの木村聖哉さん、片淵建築事務所の樋口寛美さん。同期では、伏見区の3DKの自宅で寺子屋「みみずの学校」を開き「みみずの井戸端会議」「自分の力を見る」などの著書がある発起

### 菅 勝彦

(一九六七年文学部卒)

東奥日報社論説委員)

人の高橋さん。また和田洋一ゼミだったと思うが、ルポライターの長谷川菫子さん。彼女には「涙晴れる日」の著書がある。そして同じ和田ゼミだった森京子さん。

また、鶴見ゼミの仲間では主賓の土井君。かれは朝日新聞記者だが、映画監督の木下恵介氏を取材中にくも膜下出血でたおれ、五回の手術をへて二年後に職場復帰を果たした。いまも左半身まひ、右目失明、左耳失聴の重い重複障害をかかえているが、可能さんが押す車椅子にのって取材活動を行っている。その体験をつづつたのが「車いす記者奮戦記」だった。

ほかには千葉県で自然生態農場を経営する「自然王国」代表の藤本敏夫君。かれは元全学連委員長で、歌手・加藤登紀子さんの夫でもある。読売新聞記者の綱木延康君。かれは卒論に太宰治を題材に「エビゴーン論」を書いて注目された。西日本新聞記者の白銀秀親君の姿もあつた。自らに妥協をゆるさない硬骨漢として仲間から一目おかれている男である。それに未生流事務局の湯浅進君、山三織物の礮水滌君、萬年社ダイレクターの川戸和英君であつた。

障害者用のトイレがあるということで、

会場には二条城近くのホテルが選ばれた。

小ホールでの会では鶴見先生が「車いす記者奮戦記」について「これは日本の未来を指ししめすものとなっている」と感想を述べられた。新聞社が障害をもつ社員のために職場を改造したことは社会システムを障害者や高齢者と共生できるように変えていかねばならない高齢社会のありかたを示しているし、夫婦のありようを偽りなく描いていることにも感銘を受けたと話された。

小ホールから仲間の部屋に移り、鶴見先生を囲んで夜が白むまでのおしゃべりとなった。ここでは高橋さんが藤本君らの運動論を批判するといったあんばいで、現在と二十数年前とを行きつ戻りつしながらの、かみあつたりかみあわなかつたり奇妙な論戦もまた楽しいものであった。

三十二年前の同志社大学への入学。北海道でも寒さが最も厳しい旭川市生まれの私にとつて京都は、何から何まで新鮮だった。残雪の郷里から京都に着くと桜がすでに散り始めていたのは衝撃的でさえあった。その後のうつつとうしい梅雨さえも、初めての体験であつてみれば、妙になまめかしいもののように感じたりしたものだつた。

そして、私にとつての同志社は新聞学研究会の同志社であつた。この研究会は新聞学専攻生が自動的に属するサークルである。だから、メンバーの色合いもさまざまだった。学生運動にのめりこむ者、ハンセン病回復者の社会復帰施設の建設に汗を流す者、思想や映画の研究に向かう者などなど。もちろん、その根にあるものはジャーナリズム研究であり、マンガや天皇制などをテーマに共同研究を行い、成果を年刊の機関誌「JOURNALISM」に発表した。

臆病者の私は学生運動からも落ちこぼれ、お決まりの文学的な関心へと逃れ込んだ。甲羅のなかに頭や手足をひっこめて、六〇年安保から七〇年安保への過渡期だった四年間をやりすごした。しかし、常にそんな負い目を意識せざるを得なく、屈折した学生時代であつた。

ゼミは鶴見先生を選んだ。社会思想史や世論宣伝などの講義で、社会や時代のとらえ方かかわり方について、教えられることが多かったためである。ただ、ゼミだけにしておけばいいものを、鶴見先生の英書講読までを取つたために痛い目にあつた。い

まもクラーク館の美しい塔をみると、この一室で英書講読のあわれな時間をすごしたことを思い出すのである。

新聞研の研究会やコンパなどで鶴見先生と同席する機会は少なくなかつた。しかし、自分の思想的な薄っぺらさを見透かされるのがこわくて気軽に声がかけれなかつた。もちろん、卒業論文の指導も受けたわけだが、ついに新聞研仲間のようには打ち解けた調子で話しかけることはできなかつた。

私はある地方新聞に就職したものの、一カ月ほどでやめてしまった。京都に舞い戻り、報告にいったら「君、軽率だつたねえ」と言われたのが、私が鶴見先生から唯一「親しく」かけてもらった言葉だった。私自身の軽率さのゆえではあつたが、今もつて情けなく思つている。

ジャーナリズムをめざして同志社の新聞学に進み、かえつてジャーナリズムに幻滅するという皮肉なことになった。マスコミ自体が一つの権力として、世論操作の片棒をかついでいるという現実をみざるを得なかつたからである。

しかし、卒業ぎりぎりの時点で、マスコ

ミへの就職に、私の背中をポンと押ししてくれたのも、教養時代に聴いた講師の一言だった。「商業ジャーナリズムに限界があるのは事実である。しかし、その限界をきちんと認識し、それに全身をぶっつけながら報道している記者は少ない。それをやるならば状況は変わりうる」そのような意味の言葉だった。

今、私は地方新聞で論説を担当している。東西冷戦の終結を望みながらも、そのような日に出会えるとは思ひもなかった。ブッシュとゴルバチョフのマルタ洋上での冷戦終結宣言は、それだけに感慨深いものだった。しかし、冷戦の終りは内戦の始まりでもあった。

また、冷戦の厚い氷が解けた下から、それぞれの民族の過去が現われてきた。もうイデオロギーの対立という免罪符はない。私たちは記憶のかなたに追いやっていた過去と改めて向き合わざるを得ない。

マルタ体制からマルタ体制への移行がいわれている。しかし、冷戦後の世界は「体制」と言えるような新世界秩序をつくり上げたわけではない。

また、冷戦の終結と連動して日本の五五

年体制もピリオドを打った。四十年前の保守と革新の、ふたつの極に向かってはたらいだ求心力はいま、遠心力としてはたらいている。その先は新たな保・保の二極になるものやら、保・保・民主リベラルの三極になるものやら見通しさえつかない。

このような時代の流れに身をゆだねていくと、混沌の中から次々に浮かび上がってくる事象について、どのように受け止め評価すべきか判断がつかなくなってくる。そうした時に、判断の手がかりを与えてくれるのが、鶴見先生から学んだ同時代への態度というべきものである。

冷戦が終結して判断基準の太い線となっていたイデオロギーが解け出してしまった。そうした中で私たちは今、国家の強制による転向とは違った、無自覚的な集団転向の過程にあるのではないかと考えたりするのである。

また、国際貢献という錦の御旗をふりかざして、大国意識やナショナリズムが頭をもたげつつあるのではないかと。五十年前の敗戦によって心底から決意したはずの平和主義が「一國平和主義」のレットテルのもとに葬り去られようとしている。

地方新聞の論説などは、大きな政治的、社会的状況に対しては、きわめて無力であることはいうまでもない。しかし、変転きわまりない時代の渦に巻き込まれながらも、疑問を声だけは上げ続けていきたいと考えている。

一月の寒さのなかを息をきらせて若王子に登り新島裏の墓参をしたことがある。まだ暗いなかをいく学生らの列に鶴見先生の姿があった。それが、鶴見先生らしくないようにも、またらしいようにも感じたことを、今も印象深く思い出す。

ついでながら、若王子山頂の新島裏の墓までは五百メートルのみちのりだそうである。この参道？の五十メートル毎に、ベニヤ板にペンキ書きの里程標を初めて設置したのは校友会青森県支部の樋口喜四郎元支部長（一九三三年経済学部卒）であることを記憶にとどめていただきたいと思う。

同志社を思うとき、私たちの卒業三年後に鶴見先生が同志社を去られたことが残念ならない。それは大学紛争の最終段階で、機動隊が学内に導入されたことがきっかけだった。「同志社百年史」によると、機動隊の導入もほとんどやむを得ない選択であっ

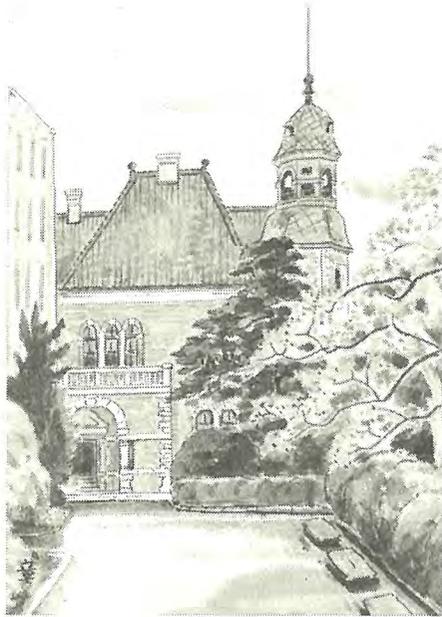
たのかもしれない。しかし、そうだとしてみてもなお新島襄の「自責三折の杖」の精神に立ち返りながら、他に選択の余地がなかったのかどうか、今後もくりかえし問い直していくべきことがらであろう。それは過去のためというよりは、同志社の今日と明日のために。

同時代意識を鋭く保つことの大切さを鶴見先生から学んだように思う。あることがらと、どのような出会い方をしたかが重要であるということ。そして自分の間違いやすさと、間違いの角度を自覚すること。

しかし、実際には時代の波に流され、自分の位置さえ読めないことが多い。そのような時、自分のあるべき場所からそれてしまった角度と距離をはかるために灯台が必要になってくる。私にとっては、それは鶴見先生から教えられた同時代意識の持ち方であり、評論家の青地農がいう「新島の『処女性』」を柱石とする同志社精神というべきものである。

これからも折りにふれて同志社を訪れたいと思う。青春を共にした仲間たちは、それぞれで生きており、同志社のキャンパスで再会することは、おそらくないであ

ろう。しかし、新聞研のボックスがあった明德館や鶴見先生の英書講読があつたクラーク館の尖塔に象徴される「私の同志社」は、自らの現在地をはかるためにはるかな灯台であり続けるに違いない。



## 同志社文学ルネッサンス(一)

——大正から昭和への時代の変容の中で——

佐々木 靖 章

(茨城大学教育学部教授)

(一)

筆者が、詩人、山村暮鳥の『全集』(全四冊、一九八九〜九〇年、筑摩書房)を編纂する過程で、京都が近代詩壇と大正期から深くかわっていることに気づき、その生き証人の一人天野隆一氏の紹介で、もう一人の生き証人である元同志社大学文学部英文科教授、児玉実用氏とめぐり会ったことは本当に幸せであった。その児玉実用氏が平成五年八月に逝去されてから一年余の時間が過ぎ去った。無理をお願いして再三氏のお宅に伺った日の事が、今も面影として脳裏に焼きついている。あの台所続きの一角

の〈書齋〉で語られた氏の言葉は、今になって反芻すれば、埋もれかかっていた同志社文化の一面を伝える貴重な証言でもあった。それを根拠に、筆者は、一昨年『京都新聞』に寄せた実用氏追悼の文章(平成五年十二月十五日文化欄掲載)の中で、大正十年代から昭和初めにかけての同志社を「一種の文芸復興気にあつた」と名付けたのである。

同志社の歴史の中で見ても、この大正十年代から昭和初めというのは、一つの飛躍の時代であつたことは『同志社百年史 通史編』(一九七九年、以下断りのない限り同志社に関する事項は本書による)を見ても

明らかである。飛躍の第一の要因は、大正九年四月、同志社が、慶応、早稲田につき、法政、明治等とともに大学令による正式の大学に昇格したことである。言うまでもなく、関西では最初の私立大学であつた。大学としての整備は、教授陣や図書の実を促し、学生のキリスト教精神の高揚は言うに及ばず、広く文化・芸術への向上意欲をもたらしした。第二の要因として、大学昇格と同時に総長として赴任した海老名弾正の教育理念を指摘できよう。つまり学内で高まった文化・芸術への意欲を一層盛り上げたのが、海老名の掲げた理念の一つ「自修啓発主義と独立自発の人物養成」であつたと考えられる。海老名の総長在任期間(大正九年四月〜昭和三年十一月)にあわせたかのように、同志社の内外で文学中心の新しい波が興つたのも、当時の時代の影響は勿論あるが、同志社の内にそれに応える教育環境が整いつつあつたためでもあることを忘れてはなるまい。

もう一つ付け加えたいことは、「同志社文学ルネッサンス」と言つても、それを純粹に同志社関係者によつてだけなされたもの限定して見るのではなく、同志社関係者

が中心になつてゐる場合は勿論、同志社関係者が一人でも二人でも関わつてゐるケースも含めて幅広く対象として考察した方が実りあるということである。特に大正期の京都は、関心と同じくする人達が、一つの学校とかにこだわることなく集つて雑誌を出してゐるようなケースが多く見られる。

そうした傾向は、文学（芸術）の持つ自由な雰囲気のごとも考えられようし、或いは当時の京都では、同好者が必ずしも多くはなかつた為かもしれない。

以下具体的に、その流れを追つてみようと思う。

## (一)

明治時代における同志社人の文学活動と言へば、徳富蘇峰・蘆花の兄弟は勿論、詩人としては詩集『十二の石塚』（明治十八年）を著した湯浅半月や磯貝雲峰、歌人としての池袋清風等を直ちに思い浮かべることができるほど豊かであり、また、『同志社文学』が明治二十年代の文壇の一翼を担つたことと忘れられない。

しかし、こうした明治期の勢いは大正時代にはいると停滞を見せ始めたのが実情で

はなからうか。そうした時期に同志社に新風を吹き込んだ一人の文学者がいた。有島武郎（明治十一年〜大正十二年）である。

有島は白樺派の作家の中では最年長で、内村鑑三の影響下にキリスト者になり、アメリカに遊学後、一時期母校（札幌農学校の後身の東北帝国大学農科大学予科）の英語教師をした後、大正五年から本格的に創作や評論の筆を執り始めていた。この有島武郎を、同志社大学神学部在学中の大島豊が斡旋して、英文科の講師として招聘したのである。その辺の事情については、平安女学院短期大学教授の内田満氏が、本誌第六十七号（昭和五十四年十一月十五日発行）掲載の「有島武郎の同志社講演」において詳述している。有島は、大正七年十月を皮切りに大正十一年十月まで、六回にわたり講義・講演（『同志社百年史』では「科外講演」と言う名称を用いてゐる）を続け、自らの芸術論を含め、バイロン、カーペンター、ホイットマン、イブセン等につき語り、聴講の学生を魅了した。京大・三高等の学外者も多く駆けつけるほどの人気であつた。

従つて、大正期の同志社文学ルネッサン

スを考える時、起爆剤の役目を果たした学外者としては、有島武郎の影響をまず指摘する必要がある。大正七年、有島が第一回の講義をした頃、京都に野淵昶を中心にエラン・ヴィタル社という演劇団体が組織されており、同志社で講義中の有島武郎に加えて野村愛生と有島生馬を招き、十月二十七日、キリスト教青年会館ホールで講演会を開催してゐる。有島武郎の新しい思想に最も早く共鳴を示した一団であつた。エラン・ヴィタル社は、『京都YMCA七十年史』（野村武夫編、昭和五十年）によると京都YMCA内に置かれており、野淵はその構成員であつた。このグループは、有島武郎の戯曲「死と其前後」の外に有島と関係の深い武者小路実篤・秋田雨雀・倉田百三等の作品を大正十一年にかけて上演して行く。『同志社五十年史』（昭和五年）によると、当時野淵は同志社の者ではなかつたが、彼のもとに集まつた者は全部同志社関係者であつたという。京都YMCAと同志社との深い関連を窺わせる。同書はエラン・ヴィタル社を日本最初の小劇場運動の担い手として高く評価してゐるが、その影響者として有島存在を記録しておかなければな

らないだろう。

大正七年の有島武郎の同志社での講義は、午前と午後に分かれており、午前は英文科向け、午後は大講室（チャペル）で同志社全体向けであった。当時の書簡に「今日から愈開講といふことになりませんが或は中途で発売禁止を喰いやしないかとピクピクしています。」（大正七年十月二十一日付け市河彦太郎宛）とあり、有島の意気込みの強さが窺われる。この時、有島が予定していた講義内容は、後に「惜みなく愛は奪ふ」に結実する愛と死の思想を中心とする芸術論ではなかったかと推測される。初日の午後の講義（講演）の様子については「帝国大学生高等学校生なども数多参り五百五十人前後之聴衆にて思ひ懸けなき盛会に有之候。」（大正七年十月二十一日付け母宛の書簡）と述べており、有島の講義を聞き伝えた青年が学外からも大挙押しかけたことが分かる。その中に女性の姿が目立つたとは、前出の内田氏の論の中に引かれている片山春一（当時英文科一年在籍）の証言するところである。当時の青年男女の求めていた物が有島の講義には期待されていたのである。同志社の企画した有島招聘は同志社の

みならず京都の知的向上心に燃えた青年達に大きな影響を与えたのであった。

### (三)

ところで、同志社の大学への昇格と新総長、海老名の作りだした芸術的な自由な学内の雰囲気と、有島武郎の定期的な講義・講演の刺激は大正十年になって、同志社に新しい雑誌の誕生を促した。大正十年九月『芸術境』の創刊である（内田満氏も前出の論で有島と『芸術境』との関連を指摘している）。この雑誌こそ、同志社文学ルネッサンスの先駆けを果たした雑誌であった。創刊号に続いて第二号は十月、第三号は十一月と順調に月刊を維持したが、第四号以下は確認出来ない。創刊号に「大正十年九月七日第三種郵便物認可」とあるので、当初は月刊で発行する積もりであったことは間違いない。

奥付によると、編輯は「同志社大学文学部内／同志社文学社」、代表者は園頼三、発行所は福永重勝経営の東京警醒社書店。同志社文学社」という名称を堂々と表に出したところに、大きな意気込みを窺うことが出来る。

巻頭には、海老名弾正が「芸術境」の発刊を祝す」という一文を寄せている。貴重なものと思うので、その全文を次に掲げる。

「同志社が講壇に於てその名を揚げて、文壇にその名を揚げなかつたのは、必ずしも文壇にその人が乏しかつたからではない。何となれば横井時雄、浮田和民、徳富蘆花、徳富蘆花、大西祝、村田勤等の如き諸先輩は既に天下の定評のある文豪文士である。

蘇峰、蘆花の文才はいふまでもない、浮田和民氏が太陽に於ける横井氏が中央公論に於ける、その優健なる筆力は二大雑誌を賑はしたるのみならず、又その品位を高からしめたのである。村田氏がルーテル伝の著者として、又大西氏が倫理哲学等の緻密周到なる論文に於て、日本の文壇にその異彩を放つたことは、皆人の知る所である。同志社が文壇に於てその名を揚げなかつたことは、人をして奇異の感に撃たれしむ。之れには深い理由が存するのであらう。

講壇と文壇とは人々の耳目に印象を与える上に於て自から相違がある。講壇に立ちたる宮川経輝、横井時雄、金森通倫、海老名弾正等の諸先輩は、何時も講壇と同志社

とを結び付けて居つた。少くとも聴衆は是等の人物と同志社とを結び付けて、その雄弁に耳を傾けたのである。彼等は到る所に於て同志社のプロパガンダとなつた。故に世間は彼等を見て、同志社が出色の雄弁家を出したるに驚き、同志社に対して敬意を払つたのである。然るに読書界に至つては、必ずしも文壇の人たる徳富氏兄弟と同志社とを結び付けて読まない。横井浮田二氏の如きとても、文壇に於てはその講壇に立ちし時のやうに、読者をして同志社を思ひ起こさしめなかつた。況んや大西氏の如き後年帝大の文学士又は博士たるを聯想せしめた。増して況んやルーテル伝を読む者は著書と著者との関係のみを念頭に浮かべて、未だ嘗て著者と同志社とを結び付けたことはなかつたらう。故に読書界は徳富兄弟、横井、浮田、大西、村田の諸氏の著作を読み、智者を敬慕するを知つて同志社に敬意を払ふに至らないのも、亦已むを得ない次第である。

同志社が文壇に其名を揚げなかつた第二の理由として数ふべきは、同志社の地位が文壇の名声を揚ぐるに適合して居なかつたからである。明治時代の文壇は尽く東京に

於て其名を揚げたのである。未だ嘗て一として東京を離れ、京阪に於て其名を揚げたことはない。著書といふ著書、作物といふ作物、雑誌といふ雑誌、東京に於て発行せらるゝにあらざれば、其声は広く天下に聞えない。徳富兄弟の声も浮田、横井の声も東京の文壇よりして、始めて天下に轟いたのである。彼等の肩書きは東京にてかかれた、彼等の商標は東京にてはられた。読書界は何の暇あつてか、態々京都の同志社まで著者の履歴に溯ることがあらう。若し夫れ同志社が東京にあつたならば、同志社の文壇に於ける名声は夙に噴々として、毫も三田、早稲田、赤門に劣らなかつたのは疑ひない。同志社はその天下を懐いて、何時までも空しく斯く蟄居して居る筈はあるまい。今や同志社はその文壇の名声を天下に揚ぐべき時が来たのである。此時に際し芸術境の生れたる時機を得たものといつてよからう。同志社が私立大学として、しかも基督教主義の学府として、新時代の先駆者たらんとするその時、芸術境の生れたる、亦謂れないことではなからう。果して今の同志社に徳富兄弟の如き、又浮田、大西二氏の如き文士文豪の継続者あるや否やは吾れ之

を知らずと雖も、同志社は同志社に於て実  
に此の如き人物を要す。要求は由来人物を  
呼び起すものである。必ずしもその人出で  
ないとは限らない。同志社は由来理想に於  
て生きて居る、神学何の故に沸き来らない  
ことがあらう。よしや芸術境が国民之友の  
如くポピュラーたり得ずとするも、それが叫  
ぶ所の声が新時代の重且大なる使命を辱し  
めざらんを望まざるを得ない。芸術境よ汝  
の使命は大である。希くは汝の前途に於て  
上天の祝福ゆたかなれ。」

この海老名の文章は、同志社と文壇との  
関連が必ずしも広く世に知れわたらなかつ  
た理由を、徳富等先輩の名前が同志社との  
関連では世間から認められなかつたことと  
場所が東京ではなく京都にあつたためと明  
確に指摘し、人材のない故ではない、人材  
待望の理想がまず必要だと述べ、声援を送  
っている。この創刊の祝辞からは、祝辞と  
しての儀礼を超えて、総長就任間もない海  
老名の同志社内における文学の新たな発  
展にかける期待もまた大きかつたことを読  
み取ることが出来るのではなからうか。

『芸術境』と有島武郎との具体的な関係を

示す文章を探してみると、創刊号の「編輯だより」の中で、沖鹽信男（英文科学生）が「此頃有嶋武郎さんの芸術家としての態度が自分によく分るやうに思へる。弱々しい青白い顔をしたる感傷家の愛の囁きは聴きたくない。自分は此号に小説一篇を載せる筈であつたが病氣のため来月に延ばすことにした。／有嶋武郎さんは本誌に非常に厚意を持つて下され、是非創刊号には書いて下さる筈であつたが、一時に子供が御病氣に罹られたので残念ながら執筆出来ないとのことである。」と書いたり、第二号の「編輯だより」の中でも「もしかしたら、そのうち有嶋武郎さんの脚本を掲載出来るかも知れません。一体私たちは、大家を偶然に祭りあげるつもりは、勿論ないのです。たゞ折々大家の作をも出して頂くのは、それが我々の刺激となり、「芸術境」を愈、「芸術境らしく」する為です。」と書いているのを見出すことが出来る。沖鹽は有島の講義を聴き作品も読んでいるに違いない。短い言葉ではあるが、有島への親近感を超えた有島の芸術観、人生観に対する強い共感を見てとることが出来る。

『芸術境』の編集関係者の中では、この沖

鹽が一番有島と係わりを持っていたように見える。ところが、第三号までを見るかぎり、沖鹽等の期待にもかかわらず結局有島の原稿は掲載されなかった。この時期有島は作家として大きな転機を迎えており、『芸術境』に寄稿する余裕を持ちえなかったであろう。

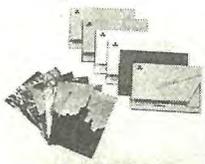




## 同志社の絵葉書シリーズ発行

西色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄の啓明館(旧図書館)、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴染んだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しております。

- 重要建築物シリーズ
  - 新島襄の面影シリーズ
  - 大学今出川校地シリーズ
  - 大学田辺校地シリーズ
  - 女子大学今出川校地シリーズ
  - 女子大学田辺校地シリーズ
- 定価各シリーズ六枚一組二百五十円



●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。  
 ●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

発行 同志社収益事業課  
 京都市上京区今出川通烏丸東入  
 電話(〇七五)一二五一—三〇三七〇八

# 同志社カレッジソングの作詞者、

## ウィリアム・ボーリス

### その作詞の経緯と生涯について

須田 一彦

(一九六四年 経済学部卒)

我国には校歌、寮歌、応援歌の類が多数あり、その学校の関係者以外の人々にも愛唱される名歌も少くない。その中で我が同志社のカレッジソング「ワンパーパス同志社」は(1)その作詞者が当時、若干二八才の無名のアメリカ人伝導者兼建築家であり、詩人としては全くの素人で同志社とは当時何の関係もない人物によって作られた事(2)その曲は、当時ドイツで愛唱されていた愛国歌「DIE WACHT AM RHEIN」(ラインの守り)であった事(3)そして、かくの如く、ドイツの曲の上にアメリカ人が作詞した英語の歌と云う混血児的な校歌であるにも拘らず、日本人の、否外国人留学生の

間にさえも「同志社マン」の誇りと連帯の象徴として、明治四一年に作詞されて以来約九〇年間、連綿として唱い続けられて今日に至る、日本を代表する名歌の一つである事……等々、他の学校の歌に比べ極めて異なった特色を有している。

私は、この「カレッジソング」の作詞者ウィリアム・M・ボーリスの名を聞き、その作詞の経緯に大いなる関心を覚え、また彼の生き方、生涯の事績等を知るに及び、非常なる感銘を受け、我が同志社の校歌の産みの親にして同志社のキャンパス建築にも作品を遺した彼の事をここに述し、その遺徳をしのびたいと念じ一筆執った次第であ

る。

#### (一)ボーリスの来日と

#### カレッジソング作詞経緯

ボーリスは、一八八〇年(明治一三年)米国カンザス州に生まれ、コロラド大学哲学科を卒業後、明治三八年二月、北米YMC Aの紹介を受けた青年会英語教師として二五才で来日、幾多の近江商人を育てた名門・滋賀県立商業学校(現在の八幡商業高校)の英語教師になった。しかるに彼は、学校で英語を教える傍ら、キリスト教の伝導活動も行つた事が、保守的な土地の人々の反発を招き、来日以来わずか二年後



ウィリアム・メレル・ボーリス  
ヴォーリスと表記の方が正確だが、今、  
地元ではヴォーリッさんとも呼ばれている

の明治四〇年三月、商業学校英語教師を解雇されたのである。……大抵の人間ならば、自分の信念と情熱が「分からず屋」の避難を浴びて挫折し、仕事はクビになり収入源も無くなる事態に嫌気がさし失意・帰国となる処であるが、彼はこれしきの挫折には負けなかった。私がボーリスを心から尊敬する由縁の第一はその点である。

自分の情熱と信念を踏みにじった憎い筈の近江八幡の地に止る決意をした彼は、商業学校在職中、正規の建築を学んだ学歴も経験も無いにも拘らず、明治四〇年二月に、自らが設計して建築した八幡YMCA会館を居所兼事業拠点として、商業学校の教員子で、彼の情熱と人柄にひかれた同志・吉田悦蔵と共に第三の人生を開拓するのである。即ち明治四〇年四月「近江ミッシオン(後の近江兄弟社)」を設立し、伝導活動を行う傍ら、YMCA会館を設計・建築した僅かな経験を活かして、何んと建築設計監督業を始めたのである。私がボーリスを心から尊敬する由縁の第二は、挫折・逆境にもめげぬその不撓不屈の精神と共に、自分の専門でもない未知の知識・技能を必死に習得して、それを己の生活の基盤にする

云う、そのたくましい精神と智慧・能力・活力である。

話をカレッジソング作詞経緯の本題に戻そう。彼の建築設計監督業の一つとして、京都にYMCA会館を建築する為ボーリスは近江八幡から京都へ出張してきており(以下の記述は河野仁昭先生著「キャンパスの年輪」による)同志社の教員F・A・ロバード邸で宿泊し、J・D・デイヴィス邸で食事の世話になる等していた。そんな関係で米国人の知人が増えたが、その一人に、同志社教員S・L・ギューリックがあり、彼はボーリスが、詩も書く青年で、本国の雑誌に投稿している事も知っていた。偶々、ギューリックは、音楽の好きな同志社の生徒達に校歌が欲しい、とせがまれていた。そこでギューリックは、ボーリスの詩才に目を付け彼に作詞を頼み、他の仲間や宣教師達も勧めた様だ。要請を受けたボーリスは(作曲までする才能は無いので)青年に向きそうな曲として、ドイツのカールウィルヘルム作曲の「ラインの守り」を選び、それに英語で同志社にふさわしい歌詞を四番迄創作したのである。以上が我が

同志社カレッジソングの創られた経緯であるが、ついでに述べると、この原曲「ラインの守り」のドイツ語歌詞はカレッジソング同様に四番迄あり、私はこれをアッチコッチ探し訪ねた末、京都のドイツ文化センターで入手した。ご参考迄に「カレッジソング」と対比したその歌詞を(資料一)に掲げる。ドイツの生命線ライン河を守り祖国を守れ、と云う単純な愛国歌であるが、現在では、過去の軍国主義を想い出させる忌しい歌、として一般には歌われず、その歌詞を識るドイツ人も数少ない由である。

## (二) ボーリスと同志社の建築・その他の作品

ボーリスは、前述の如く明治四〇年四月、



同志社に於けるボーリスの建築  
作品第1号啓明館(大正9年竣工)

*mf dolce*

Land  
1. sein?      Dear    Ma    Ma    Ma    ter,    sons    of    thine,    Shall  
Lieb    Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein, lieb

2. mark.      Lieb    Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein, lieb

3. Brust!      Lieb    Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein, lieb

4. Strand!      Lieb    Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein, lieb

5. sein!      Lieb    Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein, lieb

*mf dolce*

*f*

be    as    bianc    es    to    the    'Vina',    Tho'    through    the    world    we    wan    der  
1. Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein;    fest    steht    und    treu    die    Wacht, die  
2. Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein;    fest    steht    und    treu    die    Wacht, die  
3. Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein;    fest    steht    und    treu    die    Wacht, die  
4. Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein;    fest    steht    und    treu    die    Wacht, die  
5. Va - - - ter\_ land, magst ru - - - hig sein;    fest    steht    und    treu    die    Wacht, die

*f*

*ff*

fer    and    wide    still    in    our    hearts    thy    pre    ceps    shall    a    bide  
1. Wacht am Rhein!    fest    steht    und    treu    die    Wacht    am    Rhein!  
2. Wacht am Rhein!    fest    steht    und    treu    die    Wacht    am    Rhein!  
3. Wacht am Rhein!    fest    steht    und    treu    die    Wacht    am    Rhein!  
4. Wacht am Rhein!    fest    steht    und    treu    die    Wacht    am    Rhein!  
5. Wacht am Rhein!    fest    steht    und    treu    die    Wacht    am    Rhein!

*ff*

# DIE WACHT AM RHEIN.

(ラインの守り)

(Doshisha College Song.  
Words by W.M. Vories  
作詞)

Allegro marcato.

作曲者 CARL WILHELM.

Cesang.

Piano.

1. Es brausst ein Ruf wie
2. Durch Hund - erd - tau - send
3. Er blickt hin - auf in
4. So lang ein Tro - pien
5. Der Schwur er - schallt, die

sha, thy name Doth, sig ni fy one loft y aim; To

1. Don - ner - hall, wie Schwert - ge - klirr und Wo - gen - prall: zum
2. zuckt es schnell, und Al - ler Au - gen bli - tzen hell; der
3. Him - mels - au'n, da Hel - den - vä - ter nie - der - schau, und
4. Blut noch glüht, noch ei - ne Faust den De - gen zieht, und
5. Wo - ge - riunt, die Fah - nen flat - tern hoch im Wind: am

*ff*

- train thy sons in heart and hand To live for God and Na - tive
1. Rhein, zum Rhein, zum deut - schen Rhein! wer will des Stro - mes Hü - ter
  2. Deut - sche bie - der, fromm und stark, be - schützt die heil' - ge Lan - des -
  3. schwört mit stol - zer Kampfes - lust: du Rhein bleibst deutsch wie mei - ne
  4. noch ein Arm die Büch - se spannt, be - tritt kein Feind hier dei - nen
  5. Rhein, am Rhein, am deut - schen Rhein! wir Al - le wol - len Hü - ter

Original in W. Greff's Männerlieder Heft IX, No. 2, Essen C. D. Budecker, Mit Erlaubniss der Verlagshandlung.

Stich und Druck der T. TRAUTWEIN schen B. u. M. Hdg. (M. BAHN) in Berlin.

2554

近江ミツシオンを設立して、建築業・更には米国の輸入雑貨販売業を開始し、明治四三年には前述の愛弟子、吉田悦蔵及び、米国人建築技師L・Gチェーピン等のスタッフを加え、「ボーリス合名会社」を設立し、近江商人顔負けの逞しいビジネス活動を展開してゆく。その事業趣旨は、単なる金儲けの為だけでなく、独自のキリスト教主義による信念に基くもので、彼のその精神に共鳴し多くの協力者が集まり、彼の建築設計監督業は好調な進展をとげ、特に関西を



ボーリス（右）及び彼の生涯の協力者となった滋賀商業学校の教え子、吉田悦蔵（左）

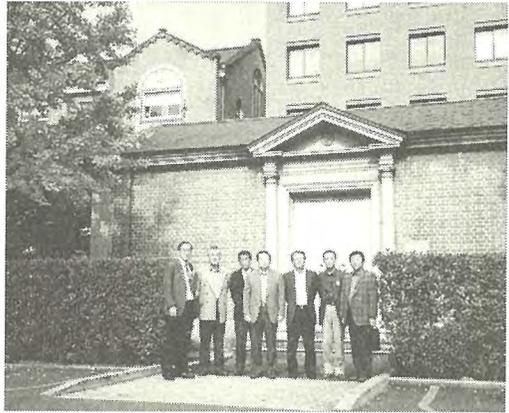
中心とするミツシオン系学校建築、更には数多くの商業ビル等の注文が相次ぎ、彼の建築事務所の産み出した作品は、関西をはじめとして日本各地に、キリスト教会・YMCA関係建築・学校建築、社会・文化施設、銀行・保険・デパート・ホテル等の商業ビル等々、今なお千数百件遺るのみならず、韓国（梨花女子大等）北朝鮮、中国の



第2号作品。アーモスト館……手前に揃ぶのはワンダーフォーゲル部1964年卒同窓生。

杭州・上海・漢口・大連そして台湾に迄及んでいるのである。これらの建築は勿論ボーリス自らの設計ではなく、彼のスタッフ群の努力と英智が産み出したものであるが、建築にはプロとは云い難い彼が、芸術家肌の数多くの建築スタッフを心服せしめ、心からの協力を得た彼の人柄・人間性と統率力は並々ならぬものがある。私がボーリスを心から尊敬する第三の由縁である。

我が同志社の建築の中で、大正七年九月定礎九年三月に竣工した赤煉瓦の「啓明館（第二代図書館）」、昭和六年九月着工十七年五月に竣工した「アーモスト館」そして昭和十六年十月定礎・十七年二月に完成した赤レンガの「新島先生遺品庫」の三棟が、ボーリス建築事務所の作品である。これらの建築は、何れもデザイン的にも美しく、機能的にも素晴らしいもので、特に「アーモスト館」は全国の学寮の中でも最も美しく秀れた作品であり国の重要文化財に指定された、礼拝堂（チャペル）・クラーク記念館・ハリス理化学館・有終館・彰栄館の諸建築と共に、我が同志社が天下に誇とする名建築である。なお、キャンパス内に五棟



第3号作品。新島先生遺品庫（昭和17年完成）

もの重要文化財建築を有する学校は、北海道大学の開拓時代の（今は使われていない）古建築を除いては、全国でも我が同志社だけであり、しかも、それらの名建築群が総て現役建築として今なお立派に活用されている事は、我々「同志社マン」のたいなる喜びである。

尚、ボーリス事務所の産み出した膨大な作品群の解説は、創元社より一九八九年十一月に発行された、山形政昭著「ヴォーリ

ズの建築」に詳述されているので、関心のある方は、その本を紐解いて頂く事とし、本稿では、同じ関西のミッション系大学「関西学院」及びその近くの「神戸女学院大学」のキャンパス基本設計から個々の学棟の設計・建築にボーリス事務所が絶大な力を発揮し、素晴らしい作品を遺した事を紹介し、その写真を掲載する程度に止めておく事と



ボーリスの作品例。兵庫県西宮市の関西学院大学キャンパス群



ボーリスの作品例。関西学院の近くにある神戸女学院大学のキャンパス

する。かくの如く、建築に関しては一介の素人としてスタートしたボーリスの、我国建築界に与えた業績と功績は、英国で正規の建築学を修め、明治十年来日し、工部大学校造家学科（後の東京帝大、工学部、建築学科）の教授として、辰野金吾等に、正統な

西欧近代建築学を伝授して、我国の近代建築学界の学祖となったジョサイア・コンドルの功績にも劣らぬ素晴らしいものである。私がボーリスを心から尊敬する由縁の

第四はこの点に在る。

### (三)其後のボーリスの

#### 事業展開とその生き方

以上で本稿の主題である「同志社カレッジソング」誕生の由来と、母校に遺るボーリスの建築作品の紹介は終るが、筆を続けて其の後の彼の「生き方と死に方」に触れたいと思う。

ボーリスの事業は其後、順調に伸展し、大正三年には、米国メンソレータム社からメンソレータムの日本での代理販売権が、更には日本での製造販売権が与えられ大正五年には、建築設計・メンソレータムに続く第三の事業として、サナトリウム（近江療養院）の開設を計画し、それが今日「ボーリス記念病院」に発展しており、また清友園幼稚園にはじまる教育事業に迄手を伸ばし、これは現在「近江兄弟社学園」として幾多の人材を産み出して今日に至っている。これらの事業は、前述の如く、単なる金儲を目的としたものでは決してなく、その根底には彼のキリスト教精神に基づく博愛主義があり、諸事業は、ボーリスの徳をしたって集まる人々による極めて家族的な組

織で運営され、その徹底した平等主義からロマンに満ちたユートピアを想わせるものだった、と言われる。

昭和九年には、「近江ミッジョン」を「近江兄弟社」と改称し、その事業部門は、庶務部・教務部・建築部・薬品部・雑貨部・療養院部の六部門に組織再編され、これらの諸事業を統括するボーリスは、日本有数の事業家に成長した。一九一九年、三九才で子爵・柳末徳の娘、満喜子と結婚し太平洋戦争の始まった年昭和十六年、夫人の一柳家に入籍・日本国籍を得て、「一柳米来留」と改名した彼は、地元・近江八幡をは



ボーリスと満喜子夫人

じめ日本各地に多くの秀れた建築作品を遺し、且つ地元の産業・文化の振興に絶大な貢献をしたにも拘らず、戦争中は敵視・アメリカのスパイ視され、一切の公職を追放されながら、その逆境に耐えた。愛妻の献身的な支援があつたとは言うものの「米来留」即ち、米国から日本に来て、ここに留まる、と決意改名し身も心も日本人になりきろうとした彼にとつて、地元の心なき人々の非常な仕打ちにジツと耐える事は並大抵の事ではなかつたであろう。

彼の卓越した忍耐力と、逆境に遭つてもくじけない、その偉大な精神力の強さに対し、私がボーリスを心から尊敬する第五の由縁が存するのである。

彼は終戦を迎えて再起をはかるが、戦前期に見せた目覚ましい活動には遂に及ばず、一九五九年七月七才の時、軽井沢で蜘蛛膜下出血の為に倒れ、近江八幡の自宅に帰り、以後、一九六四年五月七日、七年間の無言の病床生活を終えて昇天する迄、永い療養生活を過すのである。……

その間、私を感動させる話が二つ伝わっている。その一は、前述の如くボーリスは医療事業も行っており、ボーリス記念病院



ボーリス夫妻の住居。元々、幼稚園教員寮として計画された粗末な木造西洋館である

のオーナーでもある。当然そこに入院して至れり盡せりの看護を受けるのが凡人の常識である。しかるに彼は「病院は病客（彼は患者をそう呼んだ）の為にあるのだ」と云って固く入院を辞退し、元々、清友幼稚園の教員寮として計画された粗末な木造二階建を自宅としその家で七年間の苦しい闘病生活を送った事。

その二は、ボーリス夫妻は子供に恵まれなかった。しかるに、蜘蛛膜下出血の為、云わば植物人間となって「子供に還った」夫に対し、満喜子夫人は「私に初めて子供がさずかった」と云って生涯、献身的な看護を続けた事である。うるわしい夫婦愛、等と云う単純な言葉で表現し得ない。この

夫にしてこの妻あり、と云うべき感動の物語である。

序でながら、永眠する迄のボーリスに対し一九三〇年、我が同志社から「社友」に推薦されたのをはじめ、戦後の一九五四年（七四才）には社会公共事業に対する功績により藍綬褒章が、療養生活中の五八年（七八才）には、近江八幡市名誉市民第一号が（これ等は、地元に対し多大な功績を遺したにも拘らず、来日後、また戦時中、彼に対



ボーリス邸のダイニングルーム。「神の国」と彼の筆になる書が掲げられている。

し冷酷な仕打を加えた近江八幡市のせめてものお詫びの印か？）、また死後には、国より正五位勲三等瑞宝章が贈られた事を付言しておく。

### 終章・彼の眠るお墓と彼の偉大さについて



恒春園の石造納骨堂

一九六四年五月七日・献身的な妻の看護も空しく遂に享年八四才で永眠したボーリスの遺体は、五月十六日、近江八幡市民葬と近江兄弟社葬の合同葬を以って遺骨は、彼が生涯居住し続けた近江八幡市郊外の恒春園と云う墓地に葬られた。

私は紅葉の美しい昨年（一九九四年）秋、この恒春園を訪れる機会を得た。訪れると丘の上に立派な石造の廟建築がある。当然これがポーリス夫妻個人の眠る墓所だと思いい、手折った紅葉の枝を供え廟前にしばし黙禱を捧げた後辞去しようとした時、一組の老夫妻が参拝に訪れ、廟の扉の鍵を開け廟の中に入ってゆくではないか！ビックリしてその後を追って廟内に入った私は、アツと感動に打ちのめされた。ポーリス夫妻個人の眠る廟だとばかり思っていた私の目に映ったのは、廟の内部にコインロッカー風に並んだ数十の遺骨安置室の扉であった。恒春園はポーリス夫妻だけの墓地ではなく、彼の精神に共鳴し、彼と苦楽を共にした近江兄弟社の沢山の同志が共に眠る共同墓地だったのである。

そしてポーリス夫妻は、他の同志と全く同じ大きさの骨収納扉の中で、しかも番号が一番ではなく、六番扉の中で眠っていたのである……

彼の名声や功績から考えれば、もっと豪華で立派な個人墓を造りそこで悠悠と永眠する事は勿論容易な事である。しかし彼は、近江兄弟社のあげる利益のおいしい所を自

分の懐に入れる様な生き方をせず常に清貧に甘んじ、仲間と同じ立場で苦楽を共にしてきた生前の在り方をそのままに、死後も、沢山の同志と全く同じ環境で、同志と一緒に眠っているのであった。死してなお近江兄弟社の平等精神を貫いたのである。

我国には何万と云う企業、団体があり、何万という経営者、団团长が居る。しかし彼等の殆どが目先の数字に一喜一憂し、業績を上げ己の栄達をはかる事を最大の念願として右往左往しているのではあるまいか



ポーリス夫妻（一柳米来留・満喜子）の眠るNo. 6の納骨扉を指す筆者

……。ポーリスの如く、己の栄華や蓄財には目もくれず、常に「仲間と一緒に、同志と同じに」と云う生き方を貫き、死後もその姿勢を貫いた経営者は恐らく空前絶後であらう。

ステータスシンボルと云う言葉がある様に、立場・身分にふさわしい処遇を受けるのが当然、と考える普通の凡人には真似の出来ない生き方である。

そして、私がポーリスを心から尊敬する最大の由縁がそこに在るのである。

……………

今、私は痛切に想う事がある。私の在字時代、私はポーリスの事を何も知らなかった。誰も彼の存在や人物像を教えてくれなかった。しかし、彼は私の卒業する一九六四年三月にはまだ存命していたのである。その当時彼の存在を知っていたら、例えば言葉は交せず植物人間の如き状態であっても、この偉大な人、ポーリスを見舞う事が出来たのに……

彼はもう居ない。しかし彼の遺した素晴らしい作品は我が母校をはじめ全国各地に今なお健在であり、彼の偉大な人間性、人徳は私の心の中に永遠に生きている、そう

信じ、ポールの冥福を心から祈る次第である。  
(完)

(追記)

一九九五年一月十七日朝、突発した「阪神大震災」の災害地にもポールの設計になる建築作品は沢山建っていた。

しかし、それらの中で大きな被害を受けた建物は殆んど無く、唯神戸女学院の建物の一棟の屋根が破損した程度であった。この事実を見ても、ポール建築事務所の技術力が如何に高かったかが判る。

ポール死してなお後も、神はポールの作品を保護し賜うたのであろうか……。



## 「くすしき神の御手」

同志社創立一一九年を迎え、現在同志社の教育を担っていらっしゃる方々、今学んでいらっしゃる方々、またこれまで同志社で学んだ方々と一緒に、記念礼拝を守ることができるとをうれしく思います。長い歴史の中で、絶えず支え導いてくださった見えざる神に、共に讚美を捧げ、感謝を捧げたいと願っております。

私は同志社に六年間学びました。そして三八年前に卒業した一人であります。私が同志社を知り、学ぶようになったのは、同志社に学んだ父からの影響によるものであります。そして私の二人の子供も同志社で学ぶことができました。親子三代牧師に

### 井 殿 園

(二九五六年大学院神学研究科卒)

安中教会牧師)

なつて働くことができず、現在は、ただただ同志社のおかげであると信じ、限りない感謝を持ち、またこのことを密かに誇りにしておるものでございます。私は今、新島先生の郷里、上州安中の教会で二五年間牧師をしております。そしてまた、安中に新島先生の教育理念を掲げて設立された新島学園、新島先生の名を押し戴いた新島学園で、キリスト教教育の一端を担っているものであります。そういう関係から今日のこの機会を与えられたことと思っております。

ご承知のことでございますが、新島先生はアメリカでおよそ一〇年間勉学をされま

した。アメリカカンボードの準宣教師ということ帰国をされ、横浜に上陸されたのは丁度二二〇年前、一月二六日のことでありました。その時新島先生は三一歳であり、翌二七日東京に出て帰国の挨拶をされた後、二八日夜明け前、人力車三台を雇って東京を出発し、中山道をおよそ一〇〇km、二〇時間かけて深夜、安中にたどり着かれたのであります。そしてその翌朝、一〇年四ヶ月ぶりに両親と涙の再会をされたのであります。丁度二二〇年前であります。安中滞在は約四週間でございましたが、その間に先生は熱心にキリスト教を人々に話されました。そして多くの人々が先生に引き付けられたのであります。これが安中教会の始まりとなりました。安中教会は、新島先生が帰国されて最初にキリストの福音を説かれた、そのことが機縁となって誕生した教会であります。

新島先生はその翌年、一八七五年早速に学校開設に向けて活動を開始されました。学校用地を大阪近辺に求めようと最初はお考えになつて奔走されましたが、土地が得られず、京都に同志社が開校されることになった訳であります。二月の二九日の夜、

八名の学生と祈禱会を持ち、官許同志社英学校が開校されたことはご承知の通りでございます。帰国されてから開校にいたるこの一年の間の、新島先生の働きは真にめざましいものがございました。またその努力は、とても我々の想像を越えたものであります。様々な困難な問題を処理されながら、時には八月二五日、人力車で一週間かけて上京され、文部省との折衝にあたられたことなども、その困難解決にあたられた先生の努力の一つとして思い起こしてよいと思います。翌々年の春、女学校も開校されました。同志社英学校は開校後三年半、一八七九年明治一二年の六月一二日、同志社英学校予科第一回の卒業式がもたれました。そして一五名の卒業生達が同志社をいで立つていきました。三六歳であった新島校長は英語でありましたけれども「行け行け、安らかに行け。強くあれ。くすしき御手が諸君を導く」と、はなむけの言葉を送られました。卒業生のほとんどが伝道者として京都に、大阪に、神戸に、岡山に、今治に、そして安中にも送り出されたのであります。同志社の五〇年史に記されている言葉であります。初代の同志社は、その学校

がすなわち教会の如くであった。したがって、同志社の教会は組合教会伝道の策源地であるかの感があった。その様に記されておりますが、開校当時の同志社を偲ぶにふさわしい言葉であると思います。

私の尊敬する親しい先輩の一人に、高道基先生がいらつしやいますが、ご存じの方もいらつしやると思いますが、高道先生は私達の新島学園の女子短期大学の学長として長くお働きくださり、現在は岐阜の中部女子短大の学長をされております。私はしばしば高道先生と新島先生のことについて語り合い、教えられる機会が多くあったのであります。「新島襄を一種の幸運児とみなす人がいるが、それは新島先生の一面のみをとらえているにすぎない」と、このように高道先生は言っておられます。新島襄を一種の幸運児とみなす人がいる。確かに新島襄は幸運児であったといえるのであります。函館の港から脱国する際、福士卯之吉と出会ったこと、そして脱国に成功したことも幸運なことでありました。また乗り込んだベルリン号の船長、セイポリー氏の援助が得られたことも幸運なことでありました。さらにワイルドローバー号のテイラー

船長の理解と協力を得られたこと、これも幸運なことでありました。これなくして新島先生はボストンにはたどり着くことはできなかったでありましょう。また、アルフ・イアス・ハーデイ氏との出会い。手厚い保護と援助を受け、父親のごとき愛情と理解を受けることができたのは真に幸運でありました。彼がおよそ一〇年間に渡る勉強を継続できたのも、このハーデイ氏の援助、また多くの学校の先生達、友人達の励ましによるものであります。これはまことに幸いなことでありました。これらなしには伝道者、教育者としての新島先生はありえなかつたとおもいます。アンドーヴァー・ニュートン神学校に在学中、明治政府が送り出した欧米教育視察団の通訳として働く機会を得たこと。これがなかつたとしたならば、密航者新島襄は政府留学生として無事に帰国することはできなかったでありましょう。またラットランドにおいて開かれた、アメリカンボードの第六五会の年会で彼がスピーチする機会をあたえられました。そして五、〇〇〇ドルの多額の寄付を受けることができたのもまことに幸いなことでございます。帰国されて山本覚馬、ジェロ

ーム・デヴィイス、こうした方々との出会い、また六、〇〇坪の土地を得てここに同志社が開校されたことも、まことに幸いなことであります。

もしも一歩一刻を誤ったとするならば新島先生の計画は破れ、その事業は成功をみるには至らなかつたであろうと思うのであります。新島先生の、志を立ててそれを敢行していく勇氣。どんな困難の中にあつても、その中に生き続ける強い忍耐力。目標に向かつて集中して努力していく、その固い意志。ひたすらに聖書を読み、祈る中で強められていった先生の信仰。これらが同志社を産み出していったことはだれしも認めるところであります。新島先生はまさにチャンスに恵まれた方であつたと思いません。まことに幸運児と言うにふさわしい、そういう歩みをされた方であると思うのです。チャンスは「前からつかまなければつかむことができない」といわれています。チャンスが通り過ぎて、後ろからいかに追いかけてもつかめないといわれています。チャンスの頭の後ろには髪がないからだといわれておりますが、新島先生は確実にそのチャンスを、前からの確におつかみにな

つた方であります。先生は同志社開校に先立つて相次ぐ困難、障害に直面されたことは先程も申し上げました。決してすいすいところが運んだ訳ではなかつたと思いません。まだ、外国人宣教師が自由に望むところに居住することは許されない時代でありました。宣教師をこの京都に迎えるには様々な許可手続きをとらなければなりません。また、住宅を入手しなければならなかつた訳であります。一八七五年明治八年の春、「宣教師は日本の学校で教えてはならない」と通告されたこともございませぬ。京都の仏教教団の強い反対もございました。京都府の知事は新島先生に「これ以上のことを起こすな」と注意をしたこともございました。更に困難なことは、学校において聖書は一切教えるはならないという厳しい制限が加えられたこともありまして。これらの一つ一つを克服されていった訳であります。宣教師達の多くから同志社を「伝道者養成のためのトレーニングスクールにすべきである」との強い要請がありました。これと対応することもなかなか大変なことであつたと想像いたします。

このように考えてまいりますと、新島先

生は決して通常の幸運児ではなかつたと思えます。多くの人々との出会い。また、そういう人々からの継続的な協力を得ることができたのは、先生の人柄であつたといわれてもいます。確かに先生は誠実な方でありましたし、清潔な方であり、そして様々な受けた恩を決して忘れない方でありました。そういう好意に、援助に、誠実に答えていく。そういう先生であつたということ。北垣宗治先生も指摘されていらつしやる通りであります。まことに、新島先生の誠実さと、清潔さと、また人々の好意にレスポンスしていくその能力、これがあつたから様々な困難を克服できたのだと思うのです。しかしながら、これまで申し上げたような協力者達、また先生自身の人間的な力によるだけではありません。第一卒業生に、はなむけとして送られた言葉の中の「Mysterious Hand guide you」といふ、あの言葉にあらわれていきますように、神のくすしき導きの御手によるものであります。まさに、先生はご自分の上に差し伸べられ、常に導いてくださった神の御手こそが、同志社を産み出したことを確信しているらつしやいました。自らをこの神の御手に

委ね、ひたすらに生き抜かれた先生だからこそ、送り出す学生達を神の御手にゆだねてゆくことがおできになったと信じております。このくすしき神の御手が同志社を産み出した新島先生をとらえ、その事業を達成させたとみるべきであります。新島先生は一八九〇年の一月、四六歳一ヶ月で病のため、大磯で亡くなられました。この若さで召されたことは、先生が決して時代の幸運児ではなかったことを証明する、一つの出来事ではないでしょうか。帰国されて一六年あまりたつてのご逝去でありました。同志社大学設立を企て、世に訴えて全国的に募金に奔走されるその途上での、壮絶な最期でありました。

私は、安中教会の新島記念会堂の右正面に掲げられている新島先生の肖像画をいつも見ております。新島先生から最初に洗礼を受けた信徒達三〇名。その中の一人、湯浅治郎という人がいました。安中教会の中心になった信徒であります、この人は家業を営みながら群馬県議会、衆議院議員として活躍をされました。そして新島先生が亡くなられた後、同志社の求めに応じて衆議院議員のその立場を一切捨てて、同志社

に来て二〇年間、同志社の財務の運営にあたられた方です。この湯浅治郎氏の伯が描いた新島先生の肖像画が、安中教会にある訳です。数ある新島先生の肖像画の中で、私は一番優れた肖像画であろうと信じております。私は四七歳になった時、改めてこの新島先生の肖像画の前にしばし座つて、新島先生を想うひとときを持ちました。何と若くして亡くなられたことであろうか、自分もその歳になつてしみじみとそのことを痛感いたしました。毎日曜日の朝、私は必ず新島先生の肖像画を見上げます。時に厳しいまなざしが注がれる。そういうように感じます。また、時には慈愛に満ちた新島先生のまなざしを、その肖像画から受けるのであります。その時その時の私自身の気持ちで新島先生の表情が変わつてまいります。ほんとに不思議な体験をいたしております。四七歳を前にして新島先生が亡くなられたこと。これは本当に避けられないものであつたのだろうか。くすしき神の導きの御手によることであつたのだろうか。そういうことを私は考えさせられます。新島先生は同志社を大阪にと、当初思つ

ていらつしやつたことは先程申し上げましたが、大阪府知事の賛成が得られず断念されたのは二月のことでありました。このころ先生はリュウマチ、頭痛、不眠症に悩んでいらつしやつたことが、その日記からもうかがえるわけです。もちろんこれらのリュウマチ、頭痛、不眠症は、新島先生がアメリカで勉強をされたその当初、もう既に苦しんでいらつしやつたことでもあります。一八八四年の夏、欧米旅行を新島先生はなさいましたが、その途上スイスで呼吸困難に陥り、遺書をしたためられたことは広く知られています。やはり体調が思わしくなかつた。そういうことが感じられます。ヨーロッパからアメリカに渡り、リュウマチを治療していらつしやる時、若い時からこれらの持病に苦しまれた新島先生であります。

一八八八年の元旦ですが、「動悸が激しく、眼が眩み、一步も進めなくなつた」ということでありました。急遽医師ペリーの診断を受けてその場をしのがれた訳であります、この動悸は一生全快しなかつたというのであります。この明治二十一年の元

且、新島先生の心臓病もかなり進んでいたように推察されます。また、新島先生は目も悪くされたことがございます。明治二一年の四月二二日、井上馨氏の屋敷で脳貧血で倒れたことがございます。ベルツ博士の診断を受けて休養を勧められました。そしてその年五月一日、先生は土倉庄三郎氏に手紙をこのように書いておられます。

「はや心臓病に相違これなく、早晚小生はこの病のために倒るべきは、覚悟せねばならざる由。小生熟考するに、むしろ戦地に在りて一步も退かざるは平素戦士の心得たるべし。」心臓病で倒れるのは、これは避けられないと。しかし、戦地に在つて一步も退くことはできない。新島先生の心中がこのように手紙に記されているのであります。この明治二一年の五月頃、先生は不眠症に悩んでいらつしやいました。鎌倉に滞在中、呼吸困難となりました。診断を受け、鎌倉の海浜院に入院されたこともございました。ふたたびベルツ博士の診断で、「この心臓病の回復は期すべからず」と医師の宣告をお受けになつていらつしやいます。

「いつ突然の死が訪れるか分からぬ」と新島先生は日記に記されております。その

年の夏、上州伊香保温泉に五〇日間静養をされました。やや体調回復をみることでございました。九月に東京へ引き上げられ、東京でまた入院されたこともありましたが、一〇月の末になつてようやく京都へおかえりになることができました。

これらのことを思い出すと、一八八八年明治二一年、先生四五歳の時であります。本當に体調は私達が思う以上に悪い状態であつたことが分かつてまいります。もちろん、このころ先生は大学設立で多忙であり、募金運動に全力をつくしておられました。

京都にお帰りになつて、その年の冬は神戸で静養されていきます。慢性的喘息を癒すためでありました。一八八九年、先生がお亡くなりになる前の年、春と夏、神戸有馬で静養をされていらつしやいます。そして一八八九年の一〇月、医師より上京を見合わすようにとの忠告をお受けになつていらつしやいました。あえて京都を出発され、募金のために上京されました。一月、東京で風邪をひいて発熱のため、寝込まれたこともあり。しかしながら一月二五日、東京を出発して上州前橋へ向かわれたのであります。そして、前橋で募金運動

の忙しい中で風邪をひかれ、発病されたのであります。そして上州での募金を断念して、赤城山を背にしたがら利根川を渡つて東京へと引き揚げられたのです。その時の先生の心境は、先生の漢詩の中に私達が読み取ることができるのであります。東京において、多くの人達の勧めを受け、温暖な大磯へ行つて静養をされることになりました。そしてご承知のように、翌年明治二三年の一月、帰らぬ人となられた訳であります。後から思えば病を圧して京都を出発されたことは、いわゆる帰還不能点を越える旅立ちであつたということであり。帰還不能点というのは、ある時点を越えてしまうと、もう決してもとに戻れないという地点であります。まさに、新島先生は病を圧して亡くなる前の年の秋、京都を出発されたことがそれに相当すると思えます。

このような新島先生の生涯を振り返つてまいります時に、先生は決してこの世的な、いわゆる幸運児ではなかつたといわざるを得ないのであります。しかしながら、このような新島先生の上に、絶えず神のくすしき御手は差し伸べられていた訳であります。

す。安中教会牧師として生涯を終えた柏木義円という方がいらつしやいました。新島先生を慕って同志社に学び、そして同志社の予科で教えていた柏木義円であります。安中教会の招きを受けて牧師となつて、四〇年間牧会をした柏木義円でありました。柏木義円は、上毛教界月報を毎月発行していきました。その月報の中に「死を賭して邁進せられたる新島先生」という一文が残っております。これを読むと、いかに新島先生が死を賭して歩まれた方が分かるのであります。まさに、新島先生は同志社設立と大学設立のために命をかけられたのであります。けつして悲壮感からいう訳ではありませんが、同志社は新島先生の生命によつて産まれて育つた学校であると思ひます。くすしき神の御手は、その死に至るまで、先生の上に強く重く差し伸べられていたと信じています。そして同志社はこの神の御手の導きによつて、また多くの優れた人材によつて今日まで支えられてきたことを思うのであります。

新島先生が特に愛唱された聖書の言葉は、先ほど読んでいただいた、エフェソ人への手紙の三章に出てくるパウロの祈り

ありました。そこにあります様に「どうか、父が御霊により、力を持つてあなたがたの内なる人を強くしてください。力を持つて、あなたがたの内なる人を強くしてください。新島先生は父なる神が御霊により、力を持つて、自分を強くしてください。絶えず心に留めていらつしやうた訳であります。ここで言う、内なる人とは理性であり、良心であり、意志である、と解釈されています。けつして、内なる人と外なる人、というような考えではなくてむしろ理性、良心、意志であると思ひます。そして、内なる人を強くしていただくということは、キリストがその人の心の中にすむことによつて、初めて可能なことであります。キリストの支配の下に生きる。これが内なる人が強くされることでもあります。そして、それによつて愛による生活をするのが可能である、と教えられております。新島先生は、この聖書の言葉を特に愛唱されたのは、そういう自らの内に働く神の力、また自らの内に絶えず働くキリストの愛を、覚えていらつしやうたからだと思います。「私達の内に働く力によつて私達が求め、また思うところの一切をはる

かに越えて神が叶えてくださるよう」に。この祈りが続いております。私達の内に働く力。私達が求め思うところの一切をはるかに越えて叶えてくださる。そういう力を新島先生は信じておられました。これが新島先生の祈りであり、信仰であつたことと思ひます。今までも、今も、そしてこれからも後も、新島先生に働いた神のくすしき御手は同志社の上にあると信じています。キリストの恵みと愛は、今までも、今も、これから後も同志社の上にあります。このくすしき神の御手を忘れるならば、同志社は生命を失うことになるでしょう。先立ち、導き給う主イエス・キリストは同志社と共に、今も、後も、これから先永遠（とこしえ）に共にいてくださることを信じております。

（一九九四年十一月二七日）

同志社創立一九周年記念礼拝

栄光館ファウラー・チャペルで収録

## Nesima Room の開設と

### 蘇仙庵文庫の展示公開

河野仁昭

(社史資料室長)

キャンパスの中に常設展示場がほしいというご要望を、何人かの教職員から直接きかされたのは、新島襄生誕一五〇年記念の展示会場においてであった。学生生徒に対する教育の上からも、卒業生に対するサービスの点においても、新島襄や同志社の歴史に関する展示が、常時なされている必要があるというのである。それは全く、いわれるとおりであった。アメリカの歴史のある大学の例などもちだすまでもないことだ。最近ようやく、アイカイヴズと並んで常設展示場が日本の大学でもつくられつつある。

同志社には昭和十七年十一月に開館した新島先生遺品庫がある。校友池田庄太郎の寄付

によるもので、日本の学校におけるミュージアムの先蹤の一つに数えうる。いや、それよりはるかまえ、明治二十六年六月には、湯浅吉郎(半月)、松山高吉、M・L・ゴードンを創立委員とする同志社宗教博物館が設けられたのである。宗教研究・教育に資するため、世界の諸宗教の祭具その他を集めて展示しようとするものであった。展示場は竣工直後のクラーク記念館の一室だったから、創立委員たちの構想はともかく、実際には宗教博物館室であった。折角のその展示室も、明治四十五年に専門学校令による同志社大学を開設する段階で閉幕の余儀なきに至った。

一方、新島先生遺品庫は、新島の遺品の定

期的な公開展示の場としての役割を果たしてきたのであったが、何分にも建坪二十四坪では狭すぎた。しかも収蔵庫を持つていなかったのである。収蔵品は年々増え、二部屋の展示室のうち奥の一室は、戦後まもなく収蔵庫に改装せざるをえなくなった。メモ・断簡の類まで含めれば収蔵品が六千点を超えるに至った現在では、残された展示室も収蔵庫にするほかない状態にある。それでもなおかつ新島展などで作った写真パネルなどの整理保管は困難の度を加えるに至っていた。

新島先生遺品庫に代わる展示場の新設は、わたしたちにとつて長年の懸案であった。遺品庫をなぜ公開しないのかというご意見やご要望があるごとに、右のような事情の説明を繰り返すほかなかったのである。

常設展示場設置の可能性が開けてきたのは、一九九四年四月に、工学部が田辺校地へ統合されてからであった。統合準備の段階から、今出川校地の整備計画が大学内では策定されつつあったが、常設展示場については確かな方針が示されたことはなかった。ハリス理化学館の二階に、一室ないし二室展示場を設けてもよいという漠然とした意向が大学の関係者から示されたのは、五月に入ってから



北林萬治郎氏（中央）と河野室長

であったと思う。社史資料室（事務室）をクラーク記念館からハリス理化学館へ移す計画に伴ってであった。同じつくるなら展示室はなるべく広くしてほしい、そのために事務室が多少窮屈になってもやむを得ない、という意味のこたえかたをわたしはした。大学はその要望を容れてくれた。ただしその新設は大学の施設としてであったが、全教職員と学生徒、そして全同志社の卒業生および市民に

むかって開放されるのであれば、その所属がどこであるかはほとんど問題にならないことである。展示場の名は「Neesima Room」と決った。

その名に多少ふさわしくないかもしれないが、開設記念展は「徳富蘇峰展」にしたいと、着工前からわたしは心に決めていた。蘇峰と新島襄の関係がいかに親密であったかは、よく知られていることである。だから開設記念展としても問題はないはずであった。しかも、蘇峰関係の資料を一六〇〇点ほど寄贈を受けてまだまがなかつたのである。寄贈のご好意に応えるには、公開展示が最善だという思いがあった。

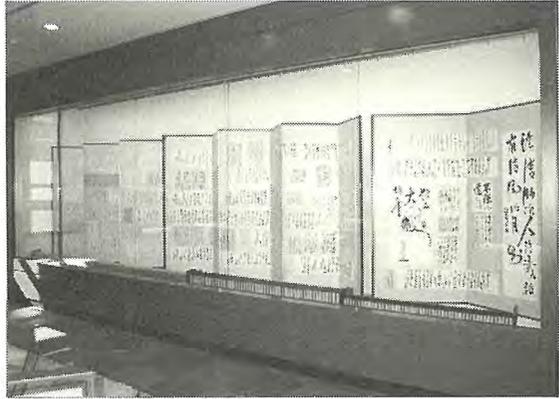
ご寄贈くださったのは、富山県高岡市大手町の仏具卸商北林萬治郎さんである。北林さんにお目にかかるまで、わたしは高岡市についてはほとんどなにも知らなかつた。その町の駅で下車したこともなかつた。

北林さんを紹介してくださったのは、朝日新聞近江八幡通信局長の佐野允彦<sup>まさひこ</sup>さんである。佐野さんが昭和四十五年に同志社文学部を卒業された方だと知ったのは、お会いしてからであった。徳富蘇峰の書などを持っている高岡市の人から、それをちよつと見て

くれないかといつてきた、わたしも一緒に行くから都合のよいとき見てやつてくれませんか、という意味の電話をもらったのである。一九九三年九月ごろだつたらう。

蘇峰は沢山本を書いた人だが、書も多い。頼まれると気軽に揮毫したのではないかと思う。だからけつこうあちこちに所蔵されている。同志社にもいいのが数点ある。その蘇峰の書をわざわざ見せていただきに行く意味があるかどうか、正直のところわたしは迷つた。取材ならともかく、初対面の新聞記者に同行するというのは、あまり気乗りのするのではない。だが、こういう機会でもなければ、高岡などという町へ出かけることはあるまいという気がしたから、一緒にさせていただくことにした。京都駅の一番ホームで佐野さんと出會つて、高岡へ向かつたのは、最初に電話をもらつてから一か月ほどのちであった。

鋳物と漆器で有名な高岡は、静かな城下町であつた。加賀藩の出先であつた城址は公園になつているらしい。広い駅前通りにも、その通りから右手に折れた位置にあるアーケード街にも、かつてはショッピング客で賑わつたというのだが、ほとんど人影がない。広い駐車場を持つスーパーが郊外に出来て、買物



Neesima Room の一部

客はそちらへ移ったと、佐野さんはいった。アーケードを抜けたところの寺の庭に、金属製の巨大な仏像が座っていた。铸件と仏具の町高岡のシンボルのように思われた。

大仏が座っている寺から、目的の家は目と鼻の先だった。細い通りに面した三階建てのビルで、「北林大仏堂」と書いたシンブルな看板が出ていた。一階の店の間には仏壇がきつ

りし並んでいて、夷川通りの家具屋を思わせ

た。

二階へ通された。その廊下に並んだ本棚は『近世日本国民史』をはじめすべて蘇峰の著作ばかりである。遺墨が二、三点ある程度だろうと思っていたわたしはうろたえた。

二階には八畳ほどの部屋が、廊下と並行して三部屋並んでいた。いちばん奥が本床つきの書齋、真ん中の部屋は仏間になっていた。それら三部屋に、今日わたしが来るというので、蘇峰の遺墨、遺品類が足の踏み場もないほど広げられている。年甲斐もなくわたしは嘆声をあげた。「どうして、ここに？ こんなに？」と、不躰にたずねた。

大仏堂の主人北林萬治郎さんは雄弁であった。そのことは齒切れがよく、虚飾がない。萬治郎さんのお父さんは大仏堂の二代目で政雄さんといった。明治三十七年生まれで、戦争末期に市内の軍需工場に三年ほど微用されたほかは、家業に専念しておられた。

終戦後まもなく、北林家は射水神社の宮司広瀬家と姻籍関係になったが、小学校長などもつとめた宮司の広瀬喜太郎さんは、蘇峰に傾倒久しい人であった。その喜太郎さんから政雄さんは重大な相談をもちこまれたのであ

る。それは蘇峰が戦犯容疑で公職を追放されたために、五十年来の秘書並木仙太郎さんが職を失って生活に窮し、折角集めてきた蘇峰コレクションを米塩の資にかえざるを得なくなっている。なんとかその散逸を防ぎたいのだが、政雄さんにそっくり買いつけてもらえないか、というのである。

政雄さんはそれまで蘇峰に特別の関心を持っておられたわけではない。しかし、広瀬さんに何度も足を運んで頼まれては無下に断わるわけにもいかず、頼み応じることになった。そのころ高岡市は鉄製の鍋や釜が売りに売れて財政的に豊かであった。仏具商の北林家もそれでうのおつていたから、金はあつた。

交通事情も食糧事情もまだ極度に悪く、政雄さんと広瀬さんは食糧をリュックサックに詰め込んで、大変な時間をかけて東京大森の並木家をたずねたのである。並木秘書が必要としていたのは、八人の家族が二年間食べられる金であった。政雄さんは持参した三万円を手渡しして、蘇峰コレクションを引き取った。昭和二十二年六月のことである。

そのころ蘇峰は熱海の晩晴草堂に蟄居していた。広瀬さんの案内で、政雄さんは早速訪問して右のいきさつを伝えると蘇峰は大いに



展示品を見る見学者たち

喜び、蘇峰の「蘇」と並木仙太郎の「仙」をとって、蘇峰コレクションを移した政雄さんの書斎を「蘇仙庵」と命名し、号を揮号した扁額を政雄さんに贈った。蘇峰八十五歳のときの書である。

政雄さんはこれを床の上に飾り、自らも蘇仙庵の号を用いて、晩年はもっぱら俳句を詠み文人画を楽しんだ。コレクションを譲り受けたことは、政雄さんご自身の人生の大きな

転換ともなった。

年に何度か蘇峰を熱海にたずねただけではない。蘇峰没後はその位牌をつくって仏壇にまつり、命日には法要をいとなんできた。昭和三十八年にはコレクションを護るためもあって、木造の家屋を鉄筋コンクリート造りに建て替えたのである。

一九九三（平成五）年七月五日、政雄さんは八十九年の生涯を終えられた。

以上が、当主の萬治郎さんから二時間にわたってうかがった話の概要である。亡父の遺志でもあり、なんとか散逸を防ぎたい。わたし自身には蘇峰に対して特別の思いはないので、もし蘇峰の母校同志社がこれを保管してくれるなら、そっくり譲ってもいい。萬治郎さんはそういわれた。お礼の方法や保管場所の問題などはあったが、わたしはお申し出を感謝して、いただけるものならいただきたいと申し上げたのである。

株式会社マルイ美術のトラックで、寄贈品をいただきに行ったのは、翌一九九四年三月であった。「娘を嫁に出すような気持ちです」と言いながら、萬治郎さんは近くの交差点まで自転車で見送りに来て下さった。

そのときにはまだ、Neesima Room 設置の

計画はなかったのであったが、わたしは「蘇仙庵文庫」と名づけて、これをなんらかのかたちで公開展示し、北林さんをお招きして謝意を表したかった。だからNeesima Roomの開設は願ったり適ったりであった。

開設記念を兼ねた「徳富蘇峰展」のテープカットがおこなわれたのは、一九九五年一月三十日であった。北林さんは奥さんとご子息（佐野允彦さんの実弟で北林家の婿養子）夫妻も連れてご出席くださった。「やっぱり同志社にもらっていたらよかったです。こんなにしていたらいい」と、奥さんはくりかえしいって下さった。奥さんがこのコレクションの手入れをしてこられたに違いなく思われた。

Neesima Room は今後、年に三回は展示替えをすることになるだろう。

## 同志社の輝く未来を再創

### ——学位制度の改革についての提言——

凌 文 軒

(新島基金外国人留学生第一号)

国際主義は新島襄先生の提唱された同志社立学精神の重要な柱です。その国際主義の具体的な表現の一つとして、新島基金は設定されていると思います。私は新島基金の外国人留学生の第一号として一九八一年の初めに同志社へ留学しました。その後、数多くの後輩達も新島基金の恩恵を得て同志社に来て研究を深める機会が与えられました。彼らの多くは帰国して中国の各分野で活躍しています。

自分の祖国のために働き、そして日中の友好及び世界の平和と人類の幸福に貢献しています。そのことは同時に同志社の国際的聲望と影響力が高められているということができません。今回、私は一九九四年度新島講座の講師

として同志社大学に参りましたが、また同志社だけでなく、日本の各地のいろいろな分野で講演活動をしました。これも力は小さくとも同志社の聲望を高めることになると思います。この機会を借りましてここで私は同志社の一員として同志社未来の国際的影響力を拡大するため外国人留学生への博士学位授与制度の改善について一言提言したいと思います。

現在、日本は世界情勢の発展に適應するため国内外の国際化を急速に進めています。国際化すればする程日本の各制度や政策などは国際的に一般的なものと同じ様に一致させて行く必要があります。そうしなければ国際

化したとは言えないでしょう。例えば日本の学位制度は国際化な標準に比して有利だとは言えないと思います。人文・社会科学の分野、特に文学博士の学位を取るのは至難の技といえます。この難しさは世界中で日本特有の学位制度の中にあると思います。このような学位制度は外国からの留学生に対して不利だけではなく日本国内の研究者に対しても不利だと思います。諸外国の学者、研究者達は日本の学位制度についてあまり理解していないので、日本の学者が外国の学者と交流する時、博士学位を持たないことからその学者はそれほど重視されないこととなります。これは日本の学者にとつて心理上の不均衡を生じることになっていると思います。また外国人留学生にとつては、日本に留学して博士課程を終了しているのに、多くの場合博士学位を取らないまま帰国することになるのでこのことは母国で軽視を受け、彼らの前途にとつて大きな不利益をもたらすことになるのです。それ故に外国の優秀な青年達は日本へ留学することに躊躇するでしょう。このことはまた日本の国際化にとつて大きな障害になると思います。

過去には同志社出身の外国人留学生が帰国

後、その国の指導者にまでなった人もあり、また有名な企業者、科学者、文学者、経済学者になった人もいます。これは同志社によって大きな光栄と言えることですが、学位制度がいつまでもいまのままであつたら同志社は次第に外国人留学生に対して魅力を失ってしまいます。それは同志社の国際主義精神が実現できないことになり、同志社の国際的聲望と影響力も減少することになります。聞くところによれば最近日本のほかの多くの大学ではこの学位制度の改善を考えているようです。

同志社は悠久の光輝ある伝統を有している教育機構です。百年前新島襄先生は八名の生徒で英学校を創立されましたが、現在の同志社は新島襄先生の立学の精神をますます発揚させ、大胆に現在の情勢に適応しない古い諸制度（学位制度も）を改革して世界諸国の諸制度に合せるべきでしょう。新たな時代の発展に適合することによって同志社の輝く未来を再創しましょう。

一九九四年十一月五日 京都にて

